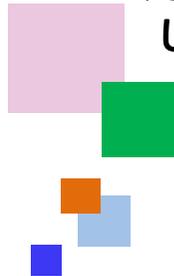


私も 応援 します



14年目の闘争

JAL不当解雇とたたかう愛媛争議団を支える会

世話人 来島頼子

2024年が明けました。今年もどうぞ宜しくお願いします。

元旦に能登半島巨大地震、2日には羽田空港での衝突事故があり騒然となりました。何がおこるか分かりませんが、この事実にしつかり向き合つて、国や行政の対応を急がせましょう。自民党がひた走る戦争への準備ではなく、9条を守る平和外交と軍事費を削つて暮らしに回せと言いたいです。

JALの解雇撤回闘争を支援している私(80歳)は、18歳で損保(日産火災)に就職し、55歳で定年。1年後から新日本婦人の会愛媛県本部役員を2年間務め、昨年12月の大会で任を終えました。激動?の62年間でした。

入社当時から全損保日産支部は闘う労働組合としてリーダー的存在でした。ストもやり、団体交渉もバンバンやっていました。沢山の労働争議も勝利の連続でした。しかし、臨調行革の波が押し寄せ、労働組合つぶしや民営化が進み、

私の定年後、日産火災は安田火災に吸収合併され「損保ジャパン」に変わりました。当時の社員は、「思い出したくもないよ」と言います。

さかのぼりますが、昭和50年頃伊予銀行で働いていた野中紀子さんは頸肩腕障害にかかり個人で労災認定を求めて闘っていました。

それを知った仲間たちが51年6月に「野中紀子さんを励ます会」を結成、私が事務局長に選ばれました。それが、労働争議に自らが

関わった初めてのことでした。今思えば未熟な経験でしたが、「励ます会」会長、弁護士、医師、大学の先生、支援団体の応援があつて野中さんは職場復帰できました。不当な働き方に対して労働者が立ちあがる!このことが職場を変え、社会を変えることに繋がつて

いると思つています。14年目の闘いに入ったJAL争議団にとっては大変な闘いですがもうひと頑張り下さい。心の底から応援しています。

航空従事者と認められない客室乗務員

「羽田衝突事故に際して」

JAL不当解雇撤回争議団(JHU)

松山市在住 林 恵美

新しい年になった途端能登大地震が起き伊方原発を抱える地元では明日は我が身と慄いた。加えて地震大国に対する政府の対策の貧困さに更に慄いた。万博や辺野古埋め立てには際限なく税金を注ぐが被災地にはわずかな予算しか組まない。批判は免れない。海外では被災者への対応は「スフィア基準」に則つて即応される。

能登へ救援物資を運ぶために離陸しようとしていた海保機とJAL機が羽田へ着陸直後衝突突上したのはその翌日2日の夕方。海保機の乗員5名は亡くなられ機長は重症と報道されている。ご冥福をお祈りするとともに

に負傷された方々の一日も早いご回復をお祈り申し上げます。JAL機に搭乗していた乗員乗客379人は全員脱出。客室乗務員の脱出誘導に世界から称賛が寄せられている。心からの敬意と労いの言葉を贈りたい。

(裏面に続く)

JAL愛媛争議団を支える会

ニュース



勝利解決の日まで
たたかう

発行：JAL 不当解雇とたたかう愛媛争議団を支える会
連絡先：愛媛自治労連会館3F愛媛労連内
松山市三番町8-10-2



2024「合同旗開き」での争議団

海外では国家資格者

一方、保安要員である客室乗務員は航空従事者とは認められていないことは余り知られていない。国が定める職業分類では接客・給仕職業従事者の一つであり、ホテルなどの接客係と同じである。飛行機の運航に関わる職種は客室乗務員以外は全て国家資格者と言っている（パイロット、整備士、運航管理、管制官、気象官など）。海外では殆どが国家資格者だ。日本では客室乗務員の98%が女性であることも関係しているのではないだろうか。

事故機には9名の客室乗務員が乗務していたが、半数近くが乗務経験半年以下の新人だったそう。開放された3つのドア責任者はいずれもベテランだったらしい。JALはかつて真冬のアンカレッジ空港でジャンボ機のスリップ事故を経験している。この時の客室乗務員は17名中5名が初フライトだった。この教訓を踏まえ客乗組合（当時）はジャンボ機に搭乗する新人は3名までと要求し内規が出来た。それに比し今回の新人比率はかなり高い。結果オンラインではなくきちんと検証されるべきである。会社は早々と新人賛美の記事を発信しているがベテランが居てこそその新人の働きだったと思う。

また、事故機はA350型機でドア数は8つ。一番前のドア2カ所に対し3名のクルーが配置されていたことも幸いしている。787型機では8つのドアに対して6名ないし7名しか乗っていない。基準を満たしていると高を括るのではなく事故を契機にドア数以上のクルーを乗せるべきだ。

乗客乗員の命を守るために「絶対安全」を胸に！！

12.22 JAL本社大包围行動

もはや解決しかない

過去最多の参加者で迫る



JHU NEWS No. 111より